

極寒キャンプ 2017



2017年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 猪苗代へ

■今年もいよいよ始まる

朝8時に集合して、私たちは車で猪苗代湖に向けて出発した。2017年2月11日午前の圏央道は渋滞している。今年も厳冬期の猪苗代湖畔のキャンプと、その翌日の温泉旅館ではぬくぬく温泉という2泊3日で地獄と天国を体験する極寒キャンプが始まる。

車は私の愛車、トヨタのベルタを私が運転している。この極寒キャンプに行きはじめて3台目になる。セダンなので荷物があまり積めないで、ルーフキャリアを装着している。そのキャリアにテントや椅子などのキャンプ用品を積んでいるので、この季節では珍しい光景になっている。

参加メンバーは私以外に3名のおじさんたち。

キャンプや鉄道旅を30年くらい前から一緒に行っている腐れ縁の最古参メンバーのKちゃん。10年ほど前からの参加している若手メンバーEちゃん、若手と言っても40代のおじさんだ。最近はこの二人のメンバーに加えているんな人が参加している。

そして今年初参加のもう一人は、昨年の地球一周の船旅で知り合い意気投合したOさんである。Oさんは京都在住なので昨夜は私の家に泊まって、地球一周の思い出話や最近行ったモロッコの旅の話で盛り上がっていた。

高速道路を約350km走って14時には猪苗代湖畔に到着する。例年に比べて1時間程遅れての到着である。日が暮れて暗くなる時間を考えるとぎりぎりの時間である。やはり朝の1時間の渋滞がそのまま影響している。

■ソースカツ丼

猪苗代駅前には食堂が何軒もあり、天野食堂という店に入る。昨年からのこの食堂にお世話になっている。

それまではというと天野食堂の隣の、かくだい食堂に立ち寄っていた。しかしそのかくだい食

堂が3年前に閉鎖になったので正直困っていた。かくだい食堂のソースカツ丼とラーメンが絶品で、毎年極寒キャンプの前後には必ず立ち寄って食べていた。

かくだい食堂のソースカツ丼は味も絶品であるが、その分量がすごい。最初のころは普通サイズであったが、10年ほど前からは徐々にカツが大きくなってきて、毎年だんだんエスカレートしてきて最後は丼ぶりの蓋が閉まらなくなって蓋が立ってしまった。

私たちが行き始めた頃は先代の老夫婦が店をやっていたが、代が替わって息子たちが店を継いでからは大盛路線になっていった。まさしく拡大食堂だ。ただ値段は850円でほとんど変わっていない。



ソースカツ丼はあまり知られていない丼ぶり料理で、少なくとも全国区ではない。ここ福島の子津地方の他に群馬県、福井県、そして長野の駒ヶ根地方でも有名ではあるが、地域によって若干差がある。

私の出身の群馬県桐生市では豚ヒレ肉を一口カツのように揚げてからウスターソースに浸けて、白米が盛ってある丼ぶりにその一口カツを4つか5つ乗せたものが出てくる。

しかし、会津やここ猪苗代では白米を盛った丼ぶりにキャベツを敷き詰めてから豚ロース肉を揚げ、いわゆるトンカツにしてから、甘口の中濃ソースに浸けたトンカツをキャベツの上に乗せて出てくる。もちろんトンカツは包丁で切っている。

他の地方のソースカツ丼も少しずつ違う。

どこが発祥の地かという点と諸説ある。どこも自分たちの街こそが本家本元と言っている、よくある話である。

ただ、どうも大正時代に東京の早稲田にあったヨーロッパ軒という店が始めたらしい。福井県出身の料理研究家の高島増太郎という人が、ドイツ留学を終えて帰国し大正2年にソースカツ丼を東京の料理発表会で発表し早稲田大学前にヨーロッパ軒を開いたという。ところが大正12年の関東大震災で被災したので、帰郷して福井市でヨーロッパ軒を再開させたという。福井のヨーロッパ軒は現存しているが、早稲田の方は現存していない。

しかしながらトンカツはソースで食べるものという一般的発想からすれば、全く別の地でこれとは別に生まれてもおかしくはない。

桐生のソースカツ丼はもちろんのこと、私は日本をいろいろ旅しているのでソースカツ丼には特に注目して食べ歩いている。どこも個性が少しずつあり、そしてもちろん旨い。どの地方にも味とそれぞれのストーリーがあるので、本が一冊書けそうな気がする。

■かくだい食堂の興亡

かくだい食堂のソースカツ丼は味とボリュームにより有名になり、隣接する他の食堂に閑古鳥が鳴いている中で多くのお客が訪れるようになる。私たちも極寒キャンプでは必ず立ち寄る常連になっていった。いつも雪かき用のスコップを一晩借り、朝は 11 時開店というのに 9 時頃には店に入れてもらうようになっていった。

その食堂が閉鎖されることになったのは、どうも遊びが過ぎたようである。お客が増えると収入も増える。人間、急に金回りが良くなるとどうしても派手に使うのは世の常である。それによって体を壊してしまったということらしい。

そんなことをこの町の事情通から聞いたのだが、事情通はここだけの話ですよと言いながら、よそ者の私たちに話してくれたのが 2 年くらい前のことである。事情通はここには書けないことまで事細かにいろいろ話してくれた。

ここだけの話ということは、既に町中に知れ渡っているというのもまた世の常である。

その年の極寒キャンプでは焚火を囲みながら「人間おごることなかれ、金には注意しろ！」という言葉が流行っていた。

■天野食堂

さて、今何故、私たちはかくだい食堂の隣の天野食堂にいるのか。この食堂がかくだい食堂のソースカツ丼レシピを受け継いで再現させているという理由である。実はレシピだけでなく、かくだい食堂の元店主が隣からやって来て厨房で作っている。

時々やって来るというが、どうも毎日来ている感じがする。そういう意味では味は完全にかくだい食堂のレベルになっている。いやそれどころかかくだい食堂よりも肉が柔らかく食感が良い。既に本家を超えているのかもしれない。

本日私はそのボリューム満点のソースカツ丼を全部食べるができなかった。昨夜〇さんと飲み過ぎたことが原因かもしれないが、かつてこんなことはなかったことが驚きであり、残念である。

せっかくのソースカツ丼を残すことなど、とても許されない。ただもう限界である。これ以上無理をすると、すぐにトイレに駆け込むことになる。

困っていたら一番若い E ちゃんが、植木さんそれ食べないのならもらっていい？と聞いてきた。そもそも二人前くらいはあるこのソースカツ丼を一人前食べた後に、更に食べられるとは頼もしいやら有難いやら。こいつの胃袋はどうなっているのかと不思議に思いながらも、有難く申し出を受け入れ、事なきを得る。

翌朝の開店時間を聞くと 11 時という。これを 9 時頃にできないかとお願いが始まる。料理は出なくても店に入れてもらうだけで良い。

昔は極寒キャンプでも朝食をつくっていたが、だいぶ以前から食堂で食べるようになった。寒い中、あるいは吹雪の中での朝食づくりは根性が出ない。だから近年はかくだい食堂を早く開けてもらって朝食にラーメンを食べることが多かった。

お願いは快く受け入れてもらい、調理は無理だが 8 時には店を開けてくれて、ストーブは 7 時から焚いてくれるという。いつもそうだが、東北の人の親切、人の良さを感じる。感謝、感謝である。

第二章 厳冬期のキャンプ

■設営

買い出しで食材、酒、薪など買い込んでキャンプ場に到着する。場所はこの地方では有名な天神浜キャンプ場で、湖水浴ができるので夏は混雑している。冬それも厳冬期には誰もいないので勝手にキャンプしているのが実態である。もちろんトイレや水場も使えない。

到着は 16 時 30 分、もう暗くなりかけている。まずは設営場所を決めることが重要だ。風が湖から吹きつけており、すこしでも風を遮ることができるようにテントを張る場所と焚火をする場所を決める。決まってしまうと、あとの設営作業は 30 分くらいで完了する。

設営完了時には既に相当に暗い。ランタンとヘッドランプを点けて出来上がったテントの中で早めの寒さ対策で着替える。

アウトドアでは体を一旦冷えてしまうと改めて温めるのは難しい、冷える前に早めの対応が鉄則である。



■アルコールも凍る

一段落すると、すぐに乾杯である。まずはビールから始まるが、ビールとは言わずに「プシュ」という専門用語？を用いるのはKちゃんだ。彼とは昔から一緒に旅行やキャンプをするが、とにかくよく飲む。それでもあまりくずれないから、単なる酔っ払いでない。筋金入りの偉い酔っ払いだ。

気温は既に氷点下になっている。この温度では水は凍るがビールはアルコール分があるので凍らない。ただしビールも -3°C くらいで凍るので、もう少し寒くなると凍り始める。

ちなみにアルコール度数が15度くらいの日本酒やワインは -7°C で凍る。20度の焼酎で -11°C 、40度のウイスキーでは -31°C で凍る。だから冬山にはウイスキーを持参するのだろう。

このアルコール度数と凍結温度の関係は覚えておく利用価値が高い。本日の天気予報では日本酒が凍るかもしれない。

冷える前に温めるということで、Eちゃん、Kちゃんがさっそく焚火を始める。風が強いので焚き付けもなかなか苦戦したが、そこは火遊びに慣れている彼らのことで何とかしてくれる。

Oさんはというとテントの湖側に雪の壁を作っている。ありがたいことに自分で必要と思っ作業をもくもくとしている。Oさんは冬山も登るので良く分かっている。

そしてKちゃんも焚火の周りに壁を作っている。かつてこのキャンプで雪の壁に大変助けられたことを思い出す。

壁が上手く作ればトランプが雇ってくれるよ、と彼らを励ました。アメリカ合衆国のトランプ大統領は選挙キャンペーンでメキシコとの国境に壁を作ると公約していた。

壁作りに小型のスコップを2つ持ってきたのが正解だった。そのスコップが翌日にも大活躍することをこの時には誰も予想もしていない。

火もおきて、焚火を囲んでの飲み会が始まる。風が強いまま雪も多くなってきた。スマートフォンによる情報では猪苗代町に大雪注意報がでたという。いよいよ本番である。

私とKちゃんはまだビールを飲んでいる。そろそろ凍り出してきたので -3°C を下回ったようである。Eちゃんは日本酒が好きで、先ほどの買い出しで買って来た地酒をうまそうに飲んでいる。もちろん冷でそれもキンキンに冷えているはずだ。Oさんもまたその地酒を飲んでいる。彼はオールラウンドドリンカーだ。地球一周の時にも何でも飲んでいたことを思い出す。

私もKちゃんもビールの次に冷えた地酒を少しいただき、間もなくホットワインに切りかえる。

ホットワインはこのような寒い時にはもってこいの酒で、北欧でもよく見かけた。赤でも白でもどちらも美味しいが、私はどちらかというと赤が好きで、Kちゃんは白が好きである。

先ほどの買い出しの時に私が赤の一升パックをカゴに入れたら、Kちゃんはその後に白の一升パックも入れた。これは挑戦状かもしれない。昔の西洋の騎士が手袋を投げつけるようなものか、そして今夜は2升かと思うが、闘志もわいてくる。こんなことで闘志を燃やしてもしょうがないか。

ホットワインはかなりの熱爛にするのでアルコール分はだいぶ飛んでしまう。従って一升といってもそんなに心配はいらない。

アルコールが飛ぶということは、飲まずに置いておくと-7℃までいかないうちに凍ってしまうことを意味する。過去の極寒キャンプでもワインが凍ってしまったことを記憶している。

ホットワインの燗は七輪で行う。この寒さでの煮炊きは全て七輪である。冬山用のガスボンベなら別であるが通常のカセットボンベは低温で気化しないので使い物にならない。

酒のつまみとして焼き鳥やシシヤモも七輪で焼く。

夕食は寒いのでほとんどいつもキムチ鍋である。通常のカムチ鍋にうどんや里芋を入れた男の手料理を私が作る。鍋はカムチベースの汁にただ具をいれて煮込むだけなので簡単だ。



■ 焚火は、暖と談をとる

七輪の有難味を本当に感じるのがこの極寒キャンプだ。そして焚火も本当に有難いと体験する。昔の生活はこんなものだったのだろうとしみじみと思えるからこのキャンプは実に楽しい。

焚火が無ければとてもこのキャンプは乗り切れない。それどころか生命の危険さえある。

極寒キャンプは寒くないのかと聞かれることがしばしばあるが、正直あまり寒さで震えるような経験をしたことがない。この焚火のおかげである。

「焚火は、暖と談をとる」という言葉が私はとても好きである。それは焚火の本質を言っているかもしれない。

焚火にあたりながら、夜が更けるまで様々な話を延々としていくのが、このキャンプの醍醐味でもある。

話の内容は他愛のないことがほとんどだが、時にはカミングアウトや真面目な話もある。大自然と焚火が人の心を自由にしてくれる。

ただ何を話したかは実はいつも何も覚えていない。それは酔っぱらっているからなのだろうが、だから良いのかもしれない。焚火と同じように全て燃やして灰にしてくれる。翌朝には灰の上にはまた雪が降り積り、何も無かったかのような光景に戻る。

今回のキャンプは吹雪の中なので、満天の星空を見ることや白鳥の声を聞く体験はできなかったが、吹雪もまたそれでまた楽しい。来る度にこの厳冬期の猪苗代湖は違う体験をさせてくれる。

■スコップ大活躍

朝 7 時前に「あのう、スコップ持っていないませんか？」という声で起こされる。声の主は通りすがりのおじさんドライバーだ。キャンプ場の横の道は昨晚降った新雪が積もっているので車がスタックして救助を求めてきた。スタックとは車輪が空転して立ち往生することをいう。

早速スコップを一つ渡して私はテントにもどるが、Kちゃんもう一つのスコップをもって救助に参加する。30分くらいして戻ってくると「大変だったよ、でも朝からいい運動になった」という。

そんな言葉を聞きながら、小雪の降るなかで撤収作業を始める。撤収も手際よく進み 9 時には出発できるようになる。

天野食堂にお願いした 9 時に間に合うはずで車を発進させたが、スタッドレスタイヤは装着しているものの新雪がかなり積もっているので 50m ほど走って雪の吹き溜まりでスタックしてしまう。

当初は簡単に脱出できるかと安易に考えていたが、これが大変なことだと徐々に感じることになる。

前輪タイヤが完全に空転してしまい、前にも後ろにも行けない。3 人降りて押ししてもらっても変わらず、2つのスコップを使っていろいろ試みるが全くちががあかない。

そんなことを全員で 30 分程頑張っていたら、前から車がやって来るのが分かる。雪が多く降り始めており視界が悪いので車はヘッドランプを点けている。この道は狭いので私たちの車が道の真ん中で立ち往生しているの、道をふさいでいる。あわてて前からやって来る車を止めて事情を説明する。

すると文句の一つも言わずに早速応援に来てくれる。地元の人のように、雪道のスタック脱出は心得ているみたいだ。彼は「なんだ、スコップ持っているのか、だったら何とかなるね。」と言い、的確なアドバイスや作業をしてくれる。それでもなかなか脱出できない。

脱出が困難なので、最悪のことを考えると JAF を呼んだらどうか。ということをおとさんと私の間で話し始める。ところが誰も JAF の会員になっていないことがわかる。非会員での要請費用は 15000 円という。

自動車保険に付帯してあるロードサービスを頼む手もあるので保険会社にも聞いてみるが、なんと私の自動車保険はこの脱出サービスが付帯されていない。

そんなことやっているうちに前からもう一台車がやってくる。当然進めないなのでその車の人も含めて大人数での脱出劇になっていく。

結局はスタックしてから 1 時間後に脱出に成功する。たくさんの人には迷惑をかけたが、親切に助けられた。新雪には親切か、と思いながら猪苗代湖を後にする。

安全をみてスタッドレスタイヤにさらにチェーンを巻き天野食堂に向かう。
それにしてもスコップは必須だと実感する。それも2本あると良い。



予定より1時間遅れてちょうど10時に到着する。既に食堂は暖かくなっており、本当に有難い。
早速、ラーメンを一人ひとつずつで合わせて4つ注文するが、Eちゃんはさらにソースカツ丼を一つ追加する。脱出劇でお腹がすいたようだが、それにしてもどんな胃袋をしているのだろうか。

第三章 地獄と天国

■奥鬼怒は遠い

極寒キャンプを始めた頃は、猪苗代湖でキャンプした翌日には近くの磐梯熱海温泉に日帰り入浴をしていた。何回かそんなことをしていたが、月曜日に会社を休めばもう一泊は温泉旅館に泊まれるねということで、温泉旅館での宿泊が追加になった。

厳冬期のキャンプという地獄の後に、次の日はぬくぬくと温泉で一杯やるという天国を体験できる。同じ体験をするのだが、この順番は決して逆にしたらいけない。人間の感動や安堵感などは時系列の変化の中で感じていく。それは旅行の行程の組み方によって感動の大きさが異なるという結果にもつながる。

それに焚火に一晩あたっていると服も体も髪も煙で燻製のような匂いがついてしまい、これをまず洗い流したい。

本日の温泉は奥鬼怒温泉郷の八丁の湯を予約してある。ともかく山奥の秘境にある秘湯で、特に冬は簡単にはいけない。

猪苗代から西那須野塩原までは高速道路だが、そこから約 200km は夫婦湊の駐車場までを一般道を約 4 時間走る。

夫婦湊まであと数キロのところまで雪が深くなって来る。路面が凍結しているのでカーブでスリップして危うく壁にぶつかりそうになる。

雪が深くなるのは山奥なので当然であるが、路面の凍結は猪苗代とは様子が異なる。登り坂でスリップすると登れなくなるので、朝の反省から安全を見て途中でチェーンを巻く。やはり安全と安心はどこでも重要なことと改めて思う。

夫婦湊の駐車場に着く。この駐車場には以前は温泉ホテルが建っていたが、東日本大震災の余震で温泉が出なくなったので閉鎖したという由緒ある駐車場だ。うむ、駐車場に由緒もないか。

ここから 7km 先に八丁の湯がある。道が細く危険なので一般車両は侵入禁止で、宿に車の送迎を頼むか歩くかである。当然、送迎をお願いしているので送迎車に乗って宿に向かう。

すると若い女性が一人荷物を転がして歩いている。送迎車の運転手が車を止めて聞くと白手沢温泉まで歩くという。それは大変だということで急きょ途中まで乗せてあげることになる。Oさんが素早く席を空けて、女性が乗り込む。女性は 20 代後半の可愛い感じの人である。Oさんの素早い対応も納得する。

奥鬼怒温泉郷には宿が 4 軒あり、そのうちの 2 軒には送迎車があるが、彼女の目的の白手沢温泉にはない。この温泉だけ、他の 3 つの温泉と枝分かれした離れた場所にある。

運転手は当たり前のようにどうぞ、どうぞと親切な対応をする。山奥の人々の助け合いの精神のようなものを感じてしまう。困ったときはお互い様、今朝のスタック脱出劇を思い出す。

乗り込んできた女性は、歩くことを全く抵抗がないようだ。乗せてもらうことには感謝はしつつ最初から荷物を転がして雪道を歩くつもりだったようだ。旅慣れた感じの彼女は淡々と話をしてくれる。私もついつい活発に会話をかわしてしまう。若い女性に対しては、じょう舌になるものだとつくづく感じてしまう。

それにしても初めてこの秘境の地にくるといふのに最もマイナーな白手沢温泉を選ぶとはただものではない。

■八丁の湯

八丁の湯には 16 時 30 分に到着する。偶然にも昨日のキャンプ場到着時間と同じになる。吹雪の中で設営をした昨日に比べ雲泥の差である。これでまた地獄と天国を実感する。

宿の本館部分は木造の古い建物で、別に木のぬくもりを感じられるログハウスもあり、今回は少しアンマッチかもしれないがログハウスを予約した。アンマッチというのは秘湯の温泉のイメージにログハウスが合わないことであるが、入室するとその快適さに恐れ入る。

そもそもログハウスとは北欧やカナダが本場なので寒さと雪に対して先人の知恵が詰まってい

る。木が呼吸することとシーリングファンの効力によって暖かさが保たれ、逃げない、冷めにくい。結露しない。などとメリットは多い。



温泉は内湯の他、混浴露天風呂など全部で6つ湯船がある。泉質は単純硫黄泉で湧出温度は52℃、やや硫黄臭のする中性温泉なので、泉質としてはあまり特出するものではない。この宿の魅力はやはり湯船であろう。

まず私たちは髪や体を洗うために内湯に入る。内湯は男女別で、男性用は温度の違う湯船が二つある。面白いのは洗い場にはカランがない。カランの代わりに細長い桶があり、お湯が満たされている。これを汲み上げて洗髪などに使うという、私にとっては初めて体験になる。

露天風呂用に内湯とは別の脱衣場がある。ほんの1~2分であるがここに着くまでに手足が冷たくなる。この脱衣場で服を脱ぐとどの露天風呂にも裸でいける。3つ露天風呂は全て混浴で、別に女性専用が一つある。

1つ目の露天風呂は四角い湯船で10人くらいは入れる広さである。温度はやや熱いが寒い外気温ではちょうど良いかもしれない。内湯よりも硫黄臭が強い。それは私好みでもある。

2つ目の露天風呂は小高いところにある。その脇には滝のような崖がある。眺望が抜群に良く、溪流沿いにたたずむ宿の半分くらいを見ることができる。宿の談話室には暖炉があり、その前を行き交う従業員らしき人が忙しく夕食の準備をしているのが分かる。

もちろん雪に覆われた溪流や山並みもよく見える。ひっそりとした山奥の一軒宿の暖かみというテーマで絵を描くならばまさしくピッタリである。そんな原風景を感じさせてくれる温泉に浸かりながら見る景色としては私の過去の経験からも相当にレベルが高い。

ここからの眺望は昼間も良いが、夜の方がさらに良い。白い雪に宿の暖色の灯りのコントラストが良くて、溪流をライトアップもしてくれている。

湯の温度は先ほどよりもやや低いが、長く湯に浸かるにはちょうど良い。

3 つ目の露天風呂は温度が低くて入れない。あとで聞いた話では地震によって湯量が少なくなったという。

八丁の湯はとにかく冷え込んでいる。寒いはずで、猪苗代湖は標高 500mなのに対して、ここは標高 1300m もある。温泉で温めた体は着替えて廊下を歩いて部屋に戻るころには手足は冷えてしまっている。

廊下にはストーブが要所に置いてあるが、廊下全体を温めるまではいかない。風呂から部屋まで歩く間がとにかく冷える。正直こんなに冷えるとは思っていなかったが、おかげで温泉と部屋の有難味がよくわかる。入浴回数も増える。

私は温泉旅館に泊まると 7 回くらいは風呂に入るが、今回はそれを上回りそうである。

食事は岩魚の串焼き、鴨の陶板焼き、野菜山菜などで味も量もちょうど良い。山奥でマグロの刺身など出てきて興ざめする宿もあるが、ここは山の幸中心に出てくる。山奥でよくこれだけ用意できるかと感心してしまう。

給仕してくれるアルバイトの若い女性がまだ慣れていないので、とても初々しさを感じる。素人丸出しのところがかえって良い。

■加仁湯

翌日は近くにある加仁湯に立ち寄り湯をしてから帰路につくことにする。八丁の湯から 500m くらい離れたところで夫婦淵の駐車場に帰る途中なので送迎車で送ってもらう。送迎車は何度か出ているので、次の車でピックアップしてもらうようお願いする。この融通がきくところが良い。それにしても地元の親切心にはうがってばかりの旅になっている。

加仁湯の温泉はというと、弱酸性の白濁の湯で八丁の湯とは全く異なる。源泉は 5 つあり、源泉そのものは透明だが、湯船にたまってから白濁するという。

最初に入った露天風呂は白濁しているので混浴露天風呂でも混浴し易い。いやそれはこちら側、男の理屈かもしれないが、女性入口から湯に浸かって湯船の中を移動できる。

弱酸性とはいえ白濁の硫黄泉で適度な硫黄臭もあって、泉質そのものは私好みなので気持ちよく混浴露天風呂で過ごす。他に誰も入ってこないので私たち 4 人が独占してしばしの時間を過ごす。本当に気持ちいい。目の前には大きな崖がそびえているが、100m くらい先なので圧迫感はない。だから八丁の湯より解放感がある。



次に入った露天風呂は、小さな湯船が5つほど仕切られて溪流沿いに横並びにある。熱い湯船、ややぬるい湯船など温度が異なる。なんでこんな風呂があるのだろうかと思って出てきたが、その謎はOさんが教えてくれた。5つの源泉を見極めるという利き酒ならぬ利き湯だという。

■おひょい

温泉や温泉宿について論じる温泉評価委員会というものを立ち上げている。通称「おひょい」と私たちが勝手に呼んでいる。おひょいは温泉に行った時だけ組織される勝手気ままな集まりで、メンバーはその時に参加した人になる。

論じるというほど仰々しいものではないが、何が良かったとか悪かったとかあれこれ批評しながら最終的には温泉の質や宿について数値化する。

評価項目はメインの温泉については泉質と湯船や風呂に分かれて評価する。高くて良いのは当たり前ということでコストパフォーマンスも評価する。建物そのものや部屋についての評価、そして景観として立地環境も評価する。尚、日帰り入浴の場合は評価できるものだけ評価する。

評価は基本5段階で場合によっては0.5刻みもあり、全て主観評価になる。参加メンバーの平均値で算出する。

八丁の湯の評価結果は、泉質4.3、風呂4.3、料理3.9、コスパ4.6、秘湯度5.0、サービス4.3、建物・部屋4.4で総合点は4.4になった。過去のデータからすると総合点の4.4はかなり高い。

加仁湯は泉質4.9、風呂4.1、秘湯度5.0、サービス4.3、建物・部屋3.0で総合点は4.3になった。

■天国から現世へ

首尾よく八丁の湯の送迎車で夫婦揃いの駐車場まで送ってもらいと、なんと昨日の手白沢温泉に歩いて行った彼女が待合室にいる。

早速、声を掛けて話始める。すると今朝も宿を早く出てここまで歩いて来たという。そしてとてもすがすがしい顔をしている。

宿はどうだったかと感想を求めると、お風呂も宿も抜群に良かったという返事が即座に戻ってくる。

彼女の話聞いていたら手白沢温泉に急に行きたくなってくる。送迎がないのと日帰り入浴もないので、この一軒宿へは宿泊目的でしか行けない。これは相当な温泉好きが泊まっていると思う。

そしてもう一つ送迎のない宿が奥鬼怒温泉郷の一番奥にある日光沢温泉というところで、加仁湯からさらに500mほど奥に入る。ここは日帰り入浴もやっているの、八丁の湯や加仁湯とのセットでも行ける。

帰りは世界遺産の日光にでて高速道路で帰宅するのだが、圏央道をまた使うのでは面白くない。京都から来ているOさんの東京見物を兼ねて、首都高速で都内を抜けて横浜経由で帰宅する。

首都高速に乗ったままであるが、東京の名所巡りもまた面白い。埼玉スタジアム、スカイツリ

一、池袋サンシャイン、東京ドーム、毎日新聞社、皇居、日銀、レインボーブリッジ、豊洲市場、お台場、フジテレビ、羽田空港、横浜ベイブリッジなど一時間ほど車窓からの景色もたまには良い。

16時に帰宅、荷物をおろして近くの居酒屋で打ち上げをする。

翌日、テントやシュラフを干す作業が残っている。雪の中での撤収なので雪は融けて水になっている。食器を洗うなどメンテナンスをしてようやく今年の極寒キャンプは終了だ。

第四章 今昔物語

現在は過去があるから、過去はさらにまたその過去があるから存在する。同様に極寒キャンプも現在に至るまでの経緯や歴史がある。極寒キャンプ誕生のその年までを現在から遡ってみる。

■2016年、若者が参加

昨年2016年はいつものKちゃん、Eちゃんに加えて私の友人の息子Sちゃん22才が初参加した。その友人家族とは、毎年の年末年始には両家族によるカラオケ歌合戦を開催しており、その時に極寒キャンプの話をしたら、是非参加したいと言ってきた。

その割には感動したとか、また行きたいと言ってこないところを見ると期待を下回ったのかもしれない。

温泉は福島の高湯温泉の安達屋旅館に泊まった。高湯温泉の泉質は私好みで、酸性度はPH2.7の強酸性の硫黄泉で白濁している。

この宿は何回か使用しており、囲炉裏の個室で夕食をとると、貸し切り風呂がとても良い。貸し切り風呂はもともと男女別の露天風呂だったが、新しく大きな露天風呂を造ったので、それまでの露天風呂を貸し切りに変更した。

貸し切りなので気兼ねなしに缶ビールを持ち込み、プチ打ち上げができる。まあ、貸し切りでなくても持ち込むが、気兼ねをしなくていいのが魅力で心の解放感で天国を満喫できる。



■2015年、息子が参加

この年はいつものKちゃん、Eちゃんのコンビに加えて私の息子も初めて参加をした。それは娘が3年前に参加して、人生が変わると弟に言っていたので、その弟つまり息子も是非参加したいと言っていた。

かくだい食堂はこの年には店を閉めていたので、インターネットで猪苗代町のソースカツ丼のうまい店を探した。評判の良い店を選んで行ったが残念ながら期待したレベルでなかった。

キャンプは天候に恵まれて、もちろん雪も降らず風もない。とはいっても雪は残っており、猪苗代湖湖畔の砂浜は雪原になっているので記念に写真を何枚か撮った。そして極寒キャンプのベストショットが得られた。



猪苗代湖は白鳥に飛来地で有名だから夜は白鳥の鳴き声を聴きながら、満天の星空を鑑賞することができた。雪原に仰向けに寝転んで夜空の星を見ると何て気持ちいいことか。みんなも同じように寝転んでいる。女の子でもいればロマンティックなこの体験に涙するかもしれない。

こんなに天候に恵まれるとは、息子の普段の行いがそんなに立派とは思えないので、やはり親の行いが良かったのか。

残念ながら息子は仕事の都合で地獄のみで天国を味わえずに帰ったが、温泉だけは入っていった。場所はいつもの高湯温泉だが、宿は有名な玉子湯をとった。玉子湯は大型観光バスも寄るところで旅行会社のパックツアーにも組み込まれている。

私はこの有名で大きな温泉ホテルよりも、小さな心配りのある宿の方が好きだ。ただ、この玉子湯は高湯温泉に来たら一度は泊まった方が良くもしいない。

■2014年、いつもどおり

メンバーはいつものKちゃん、Eちゃん、そして宿泊は高湯温泉の吾妻屋旅館に泊まった。

この吾妻屋もよく使う旅館で、露天風呂が実に素晴らしい。旅館の裏の坂の上にある露天風呂に行くのに屋外を1~2分歩いていくが、少し上ったところなので見はらしもよく、解放感がある。ビール片手にこの風呂に浸かっていると、本当に天国にいる気分だ。

また、この宿の女将の丁寧な対応が、やや浮世離れしている。年齢は別として、これがまた天国の天女のように感じる。いや、本物の天女だったらもっと年を取っているか。

■2013年、3回目のキャンプ断念

メンバーはいつものKちゃん、Eちゃん、ところが今回はいつものキャンプしていない。

風があまりに強くていつもの天神浜ではテントを張ることができない。いろいろ場所を探したが見つからず、猪苗代湖を左まわりに一周してしまった。結局はキャンプを諦めて天神浜の隣にある志田浜に急きょ宿を取った。

志田浜は猪苗代湖の湖水浴場で有名なところで宿泊施設も多い。そのリゾートホテルに泊まり、翌日は2013年大河ドラマの舞台になった会津若松を観光して高湯温泉安達屋に泊まった。

過去の極寒キャンプでキャンプできなかったことは、これ以外に2回ある。

そのひとつは2010年である。メンバーはKちゃん、Eちゃんのいつものとおりだが、豪雪のため那須ICで高速道路を出された。当然猪苗代まで行けないので急きょ那須の北温泉旅館に宿をとり極寒キャンプならぬ極寒温泉旅館になった。

北温泉旅館に電話で予約したときには、当館の部屋の暖房はコタツしかないので防寒装備で来て下さいとのことだった。もともと極寒キャンプをするつもりだったので問題ないと答えたが、何ともすごいことを言う宿であると3人で大笑いしていた。

その北温泉に行くのも猛吹雪で大変であった。スタッドレスタイヤだけでは新しく積もった深い雪には弱いので、チェーンを巻いた。チェーンを巻かないスタッドレスタイヤだけの車が道路の脇に放置された姿を何台か見た。

北温泉旅館から出る時もまた大変だった。バスはどこまで来ているとか、どこからは除雪されているとかの情報が宿の中で交錯し、どうやって下山しようかという方法についてあれこれと宿の中ではお客どうしで話題になっていた。

ひとりのお客が意を決し出発するときには、残ったお客はみんなで励ましたり、アドバイスしたり、さらに装備の雪対策まで手伝っていた。そしてまた一人、二人と出発していく。その度に宿のお客全体に妙な一体感が生まれたことを思い出した。こんなことは初めてで、良い経験になった。ただその時はそんな余裕はとてなかつた。

そしてもうひとつは2001年、参加したメンバーはKちゃん以外にSちゃん、Yちゃんだ。二人とも初参加ではなく何回かキャンプに来ていた。

磐越高速道路を猪苗代に向かっていたものの、大雪のため磐梯熱海ICで降ろされた。そこからは一般道走行になったが、延々と渋滞が続き何時に到着するかまるで分からない。キャンプを断念し新野地温泉に宿を取った。

■2012年、娘が参加

メンバーはKちゃん、Eちゃんに私の娘が参加した。当時娘は郡山市に住んでいたのもので途中でピックアップした。2017年の現在まで唯一の女性の参加だ。

娘はちょっと前まで北海道大学に通っていたので、寒さには強いと豪語していた。いつも研究室のみんなでジンパをしていたという。ジンパとはジンギスカンパーティーの略で、寒い札幌の屋外でやっていた宴会だという。北海道大学の耐寒と酒飲みの実力拝見となった。

この日の天候は相当にひどかった。過去の極寒キャンプでもワースト 1、2 であろう。吹雪なので雪と風の両方なのだが雪よりも強風が問題だ。

その吹雪の中のテント設営はかなりきつい。娘も植木家で育ったので小さい頃からキャンプ生活やテント設営をしていたが、この天候にはかなり驚いたようだ。

テントが風に飛ばされないように、この紐を持っているとかポールを持っているとか手伝わせて、おじさん連中が淡々と作業をこなし、何とか設営を終えた。

あとで娘に聞いたが、本当にどうにもならないのではないかと思ったという。K ちゃんは「今回の極寒キャンプは上級者用だったね」と一言。

しかし幸いにも夜には少し風が緩和し、雪の壁も作ったのでキャンプはそれなりの状態になった。まあ、吹雪でも飲むしかないなので、焚火を囲む宴会はいつものように盛り上がった。



ワインは一升パックが 2 本あいた。もちろんホットワインだ。そして日本酒の冷、焼酎のお湯割りなど、暖を取るには体の中からも重要だ。

娘が北海道で過ごした学生生活は無駄ではなかったようだ。

■ 極寒キャンプはいつ始まった？

2011 年以前も極寒キャンプにはほぼ毎年行っていた。最初の極寒キャンプまで遡る。

2011 年はキャンプの後に会津の東山温泉、伊東園ホテルグループのパークホテルに泊まる。1000 円割引券を入手していたので、なんと飲み放題付一泊二食 5800 円だった。

2004 年は本栖湖でキャンプし、翌日は信州の白骨温泉に泊まった。猪苗代湖以外でのキャンプは初めてだ。

白骨温泉はこの 2004 年に温泉偽装で大問題になった。それは乳白色の湯が透明化してきたので入浴剤を入れていたことが発覚した事件だ。そして白骨温泉以外の伊香保温泉などでも水道水を温めただけの旅館も出てきて温泉業界全体で大騒動になった。それ以来法律が改定され加水や加温、入浴剤の有無などを表示するようになる。

しかし当時の私がこの事件に注目したのは偽装そのものではない。白骨温泉で使っていた入浴剤が草津温泉ハップというのもので、改めて草津温泉の泉質主義を再確認できた。

2003 年はキャンプ場に管理人がいたので料金を払った。全く当たり前の話だが極寒キャンプでは初体験だ。そういえば最近でも管理人に会ったが、料金の請求もなく逆に薪をもらった。

2002 年も大雪のためキャンプ場入口でスタックして脱出に 30 分かかった。設営完了は完全に日没後だった。深夜は星がきれいに見え、風もなくなった。ただし気温は -9°C だった。

1999 年の朝は、テントの端が風で持ち上がったので目が覚めた。地吹雪の中での撤収作業は尋常ではなかった。

1995 年が極寒キャンプの最初だったらしい。らしい、というのは残念ながら明確な記録がない。ただし、写真が残っている。逆に言うとそれより前には極寒キャンプの写真がない。

■何故、冬の猪苗代湖？

よく聞かれるが、そもそも何故、極寒キャンプというそんな酔狂なことをするようになったのか。

それは 1990 年頃からアウトドアブームが到来して、猫も杓子もみんなキャンプをするようになった。比較のお金もかからないし、家族や仲間との交流、自然とのふれあいは若いファミリー層にはもってこいであった。すると当然のようにキャンプ場は混雑し、そのため予約が必要とか、狭い区画割り当てなどにも至った。それはキャンプの持っている自由、解放感、自然とのふれあいなどが無くなっていった。

私たちは人がいないキャンプを求めた。例えば 10 月の西湖の自由キャンプ場に行ったが、まだまだ人が多い。ただキャンパーの質は異なっていて、初心者は少なくなり根っからのキャンプ好きが集う。ギターやバンジョーの生演奏などを楽しむ人たちもいた。

さらに 11 月、12 月と富士五湖周辺のキャンプ場に行くが、まだ人が多い。

もう誰もいないだろうと考えてクリスマスに本栖湖に行った。するとカップルがレガシー・ツーリングワゴンでキャンプに来て、テーブルを出してその上に小さなクリスマスツリーを飾ってワインで乾杯をしていた。そんなカップルが何組もいた。

このことが、おじさんたちの心に火をつけた。人がいないキャンプ場はどこだ。

かつて頻繁に行っていた猪苗代湖が頭に浮かぶ。そして時期は厳冬期だ。

■キャンプ大好き少年は還暦に

私のキャンプ歴は高校 1 年生に遡る。群馬県の桐生から榛名湖まで自転車にテントを積んで友人とキャンプに行った。キャンプの知識もない少年たちは、夕立の大雨によってテントの中まで浸水した。さらに炊飯途中で固形燃料が終わってしまい、夕食はかっぱえびせんだけになった。

1976 年大学 2 年でワンボックスカーを購入して、夏休みに 3 人で日本一周 50 日間の旅をした。車体には「日本一周 男が行く」とペイントして 9521km を走破した。宿泊の 1/3 はキャンプ、1/3 はユースホステル、残りの 1/3 はお寺、民宿、映画館など様々だった。

当時は黄色い三角テント全盛で、私たちの青いドーム型テントは斬新で注目を集めた。

大学時代から社会人になってからキャンプのスタイルは、キャンプ道具と一緒に車の屋根にデインギーのヨットを積んで、能登半島、猪苗代湖などに行っていた。

子供ができてからはヨットを積んでいく回数は激減した。一泊二日のキャンプが増えたからで、富士五湖周辺や神奈川県内のキャンプ場が多くなった。

キャンプのスタイルは車で行くオートキャンプだ。同行者は同僚、友人、家族、家族ぐるみと様々だ。毎週週末のたびに行っていた頃もあった。

結局、私のキャンプ歴は40年以上になる。何泊したかは、300泊くらいまでは数えていたが、途中から数えなくなった。最近は極寒キャンプ以外ほとんど行っていない。

昔、友人家族と一緒にキャンプに行った時、友人の息子にキャンプ300泊の話をした。そうしたら小学生の彼から返ってきたのは「疲れませんか？」だった。

それ以来は回数ではなく、質だと思うようになった。

質という意味ではキャンピングカーで回った北海道家族旅行を思い出す。レンタルしたキャンピングカーは米国製で豪華この上ない。日本製とはレベルが違う本格的なものだった。

キャンピングカーの旅は全く異なるということを体験した。全てが車の中にあり、リゾートホテルごと移動するというイメージだ。言葉は似ているがオートキャンプとキャンピングカーは似て否なるものである。

それは船旅のイメージにも共通している。そしてそれが地球一周の船旅にも発展したのかもしれない。

旅の質を向上させることとは、新たな挑戦をすることかもしれない。

第五章 これから

■家族キャンプ復活

2015年10月に家族で静岡の田貫湖へ行った。実に17年ぶりの家族キャンプで、家族も増えている。娘は結婚して、夫つまり義理の息子も一緒に参加した。近くに住む大学生の甥も来た。

快晴の青空と紅葉で少し色づき始めた木々、そしてテントサイトに設営された様々な色や形のテントがいかにもアウトドアの雑誌に紹介されるような秋のキャンプだ。

田貫湖は富士山のほぼ真西に位置しているので、夕方には夕陽で富士山が赤く染まる赤富士が大きく見えてとてもきれいだ。

もちろん暗くなってからは、焚火で暖と談をとる。そして子供たちもみんな酒も飲める年齢になっている。ホットワインの味わいはもちろん、その場で串に刺して七輪の炭火で焼く塩と七味のシンプルな味つけの焼き鳥の旨さを分かってくれるのは実に嬉しい。

焚火の談はというと、この年に流行った半沢直樹のテレビドラマの登場人物を模して薪に名前を付けたりして盛り上がっている。

この時だけでなく、薪はいろんな人間の名前を付けてくべることが多い。〇〇君、一気に燃えろ！とか。△△よ、もっと頑張れとか。そして登場した人たちは、みんな最後は灰になっていく。

焚火にあたりながらそんな会話を子供たちとすることで、改めて久しぶりに家族キャンプに来てよかったと思った。

家族も増えたが、人数だけではなく昔とは全く違うキャンプになっていることに気がつく。



同じ2015年の年末に年越しキャンプということで、また同じメンバーで今度は本栖湖にてキャンプした。

かつて本栖湖は、人がいないキャンプ場を求めて頻繁に来ていたところだ。

本栖湖のこのキャンプ場は富士山がきれいに見えることで有名で、1000円札の裏面にある富士山の写真はこのキャンプ場のすぐ近くから撮ったものである。新年を迎えるのにあたり富士山から上る初日の出を見るために、このキャンプ場にキャンパーが集まってくる。車のナンバープレートを見ると福岡、札幌、京都ナンバーもある。

テントサイトを見て回ると、いろいろなテント設備が目にとまる。ティピーと呼ぶインディアンテントのてっぺんからは煙突が出ている。もちろん中には薪ストーブがある。家形のテントの脇から煙突がニョキと横に出ている。このテントにも薪ストーブがある。

テントの横にアウトドア用のシステムキッチンのようなものを設置して、折りたたみの大きなテーブル置いている。

既にキャンプを超えている。いや、私のキャンプの概念を超えていると言った方がよい。

キャンプの設備が進化して人々の求めるものも、質も変わってきているを感じる。



■ 2030 年

私は久しぶりの 2015 年の 2 回のキャンプで質の変化を感じた。それは自分たちが年を取ってステージが変わっていることやテクノロジーの進化、そして人々のキャンプに対する価値観の変化でもある。とにかく時代は変わっている。

これからどんなキャンプをしていくか。

猪苗代湖とは違う環境や、安全が担保できればもっと寒いところも良いかもしれない。一回くらはキャンピングカーで極寒キャンプをしてみたい。さらにいろいろな人とも行きたい。

究極の極寒キャンプの姿というのを話し合っ決めて決めるのも良い。そしてそれを目指すというのも面白い。

いったいいつまで極寒キャンプを続けるのか。仲間うちでは前にもそんな話が出ていて、とりあえず区切りのよい 2030 年までとしている。その時に私は 73 才になっている。